

# 子どもに多い 病気について



佐伯地区医師会

かわむら・たかし

河村 隆先生

## なるほど!!健康講座

問合せ 廿日市市保健センター ☎1610

子どもに多い病気は何と云っても「感染症」です。感染症とは、細菌やウイルスなどの生物（病原体）が人の体に侵入して（感染）、何かの症状を引き起こしていることをいいます。人間には病原体から自分の体を守る力が備わっています。これを「免疫力」と呼びます。生後半年ごろまでは、胎児のときに母さんからもらった免疫力が多少備わっていますが、この時期を除いて、子どもでは年齢が低いほど免疫力が弱いといえます。従って年齢が小さいほど、いろんな感染症にかかりやすいのです。

感染症を治療するにはどうするか？ 病原体を薬で退治する。もつともなお答えです。しかし、落とし穴が2つあります。1つは、ウイルスを退治できる。抗ウイルス剤」というものはほとんど無いということです。小児科クリニックで抗ウイルス剤で対処できるのは、インフルエンザ、水ぼうそう、ヘルペスという病気くらいしかありません。その他のウイルスに対しては薬がないので、本人の免疫力が回復の鍵になります。細菌に対しては退治できる抗生物質がありますが、抗生剤の効きにくい細菌もあります。また免疫力の弱い小さな子どもの場合、抗生剤を投与しても感染を十分に抑える

ことができない場合もあります。

そこで大切なのが予防接種です。結核菌や肺炎球菌、インフルエンザ菌に対しては、乳幼児期にかかってしまうと抗生剤で治療してもよい結果が得られないことも多いため、生後2カ月ごろになったら予防接種を始め、免疫をつけるようにします。また、百日咳に対する免疫はお母さんのお腹の中で引き継ぐことができないため、これも早めに予防接種を開始します。ポリオ、麻疹（はしか）、日本脳炎などのウイルス感染症には、特別な治療法がなく重症化することもまれでないため、やはりワクチンで防ぐことをお勧めします。また、ロタウイルスワクチンは生後6週より使えるようになります。

一方で、感染症にかかり自分の力で治すことで、自分の免疫力を高めることにもなります。年齢が小さく免疫力が弱い時期、治療法が難しく重大な結果になる恐れのある大きな病気に対してはワクチンで積極的に予防し、軽い感染症は必要以上に恐れることなく、メリハリのきいた対応をしていくことが大切です。

※インフルエンザウイルスとインフルエンザ菌はまったく別のものです。